

## 「出会い」 利尻町立利尻中学校 教諭 大平 裕二

教員という仕事をしていると避けて通れないのが異動である。定期的に、生活する場所と仕事をする場所を変え、そのたびに別れと出会いを繰り返す。どちらも大変なのであるが、特に出会いは緊張や不安で押しつぶされそうになる。きっと生徒も同じであろう。この先生は「優しいのか」、「おもしろいのか」、「厳しいのか」など、最初に出会う瞬間は特に刺さるような視線で見定めてくる。こちらも同じように生徒の表情を見て、生徒の様子を感じ取る。そんな出会いで、忘れられない出会いがある。それは、利尻中学校に異動して、初めて受け持った学級との出会いである。

始業式の日、初めて生徒のいる教室に向かう。階段を上がり、教室が見えてくる。教室からは、まぶしい光が溢れてきている。その奥に、生徒の顔が一人二人と見える。そして、まぶしい光の中に入る。生徒の顔を一人一人見てみる。みんな不安もあるが、温かい表情だ。その瞬間、それまでの緊張や不安が一気に吹き飛び、心がジーンと温かくなった。あの感動は忘れられない。利尻中学校の生徒に出会うまでのドキドキと、生徒の顔を見た瞬間に不安が吹き飛んでいく感覚は忘れられない。この感覚は、多くの先生が感じていることである。毎年新しい先生が緊張して3年生の授業に行くが、授業をしていくとどんどん緊張が解け、最後には笑顔になって授業を終えている。外部講師の方を読んで、話をしてもらっても同じである。利尻中学校の3年生には、いろいろな人を温かく受け入れて、人の心を動かす力がある。

どうしてそんなことができるのだろうか。きっと、他人を受け入れようとする心がそうさせているのかもしれない。この学級の生徒は、互いの特徴をよく理解し、得意なことも苦手なことも知っている。得意なことがあれば、それを認め、苦手なことは仲間で支え合うことができる。それは、先日の学校祭の活動でも見られた。それぞれの特技を生かすのである。声が大きい人は声を出し、ダンスが得意な人はどんどん覚えて教えてく。苦手な人は得意な人に教えてもらう。時間を意識して、声をかける人もいる。動画を編集する人もいる。困っている人の相談に乗るのが得意な人がいる。創作が得意な人もいる。それぞれが、自分の得意を生かしながら、一つの作品を作っていくのである。決して上下の関係ではなく、対等な関係であり、互いを尊重しているのである。

これからの社会は、先の見えない社会と言われている。そんな社会であっても、多様性を認め、受け入れていける子供たちなら、どんな仲間とも新しい社会を創っていけるであろう。13名の生徒との出会いからもらった感動は大きい。その感動を、今度は自分が与えられるようにしていきたい。